

「北魏」(386～534)

三国時代(魏・呉・蜀)より塞外の地の遊牧民族の勢力はしだいに大きくなり、洛陽、長安を攻めるほどになった。

なかでも鮮卑族はしだいに支配地域を拡大し、都を平城(大同)に置き華北を統一して北魏を興こした。ここから南北分断の時代が始まる。

北魏は仏教に深く帰依しており、これを厚く保護したため仏教は盛え、雲崗に仏教石窟の開さくを始める。その後仏教は排撃された。

北魏鮮卑族は多くの漢民族を支配してゆかなければならず国策として漢化政策を積極的に取り入れ都を洛陽に移し漢化政策を徹底さすため、遊牧民族の風俗、習慣、言語、騎服、言語等を禁止する。洛陽に遷都すると、再び仏教は盛え洛陽郊外伊水の龍門に仏教石窟の開さくを始める。龍門には大小さまざまな仏龕がほられた。(開さくは唐の時代にまで及ぶ)

仏龕のなかの造像にはどれも発願の由来を示す銘文が刻されていてこれが龍門造像記といわれる。

龍門造像記は北魏書道の代表的な書で龍門二十品があることはよく知られている。

龍門造像記の特徴は概ね形は素朴で重厚で力強く、線は切れ味よく健康感に溢れている。



龍門石窟



古陽洞（匠出版 ビジュアル・ガイド龍門造像記より転載）



長樂王丘穆陵亮夫人尉遲氏造像

「牛櫛造像記」 太和十九年（496）

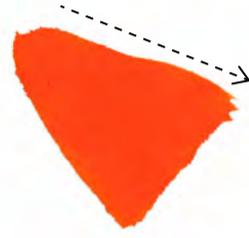
長樂王丘穆稜亮の夫人尉遲^{うっち}が忘き息子牛櫛のために弥勒像を造ったと刻されている。

字形はよく整い整然としてよく洗練され、大胆な運筆に力強くたくましい精神がみられる。

北魏書の方筆のさきがけとなっている。

太和九年十一月使持節司空公長樂
王長穆陵亮夫人尉遲氏造像記
鑿石造此弥勒像一區願牛欄捨於公段
之鄉騰遊无礙之境若存託生生於天上
諸佛之所若生世界妙樂自在之處若有
苦累即今解脫三塗惡道永絕因趣一切
衆生成蒙斯福

基本点画



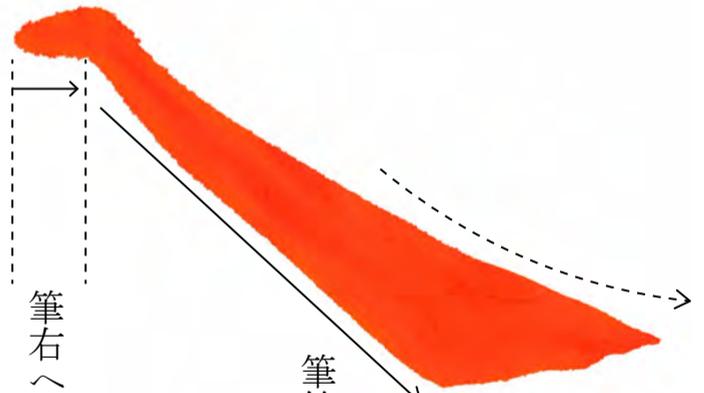
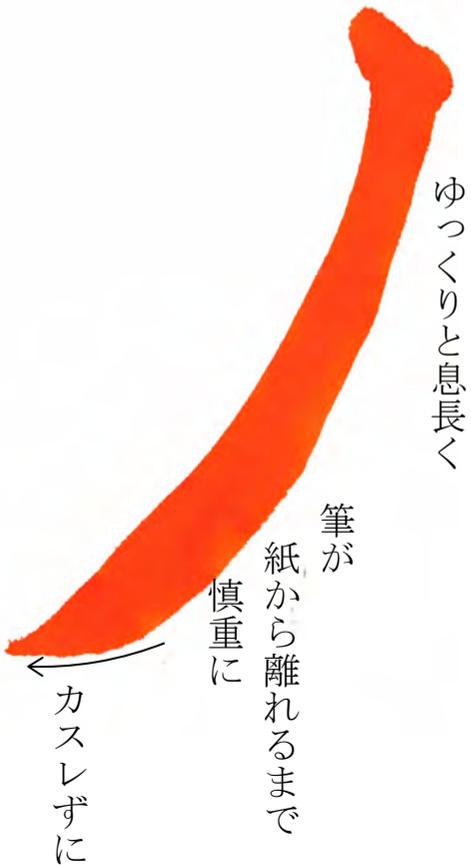
高い所から打ち込む
筆管手前に傾け
筆先上辺通過



一瞬止めて右上方に
力を抜く

筆を浮かさず
勢いをもって

入筆鋭く強く



筆右へ水平移動

筆管手前に倒す

筆先上辺を通過

九 太

年 和

年

九

和

太

牛

止

柳

息

柳

牛

息

止